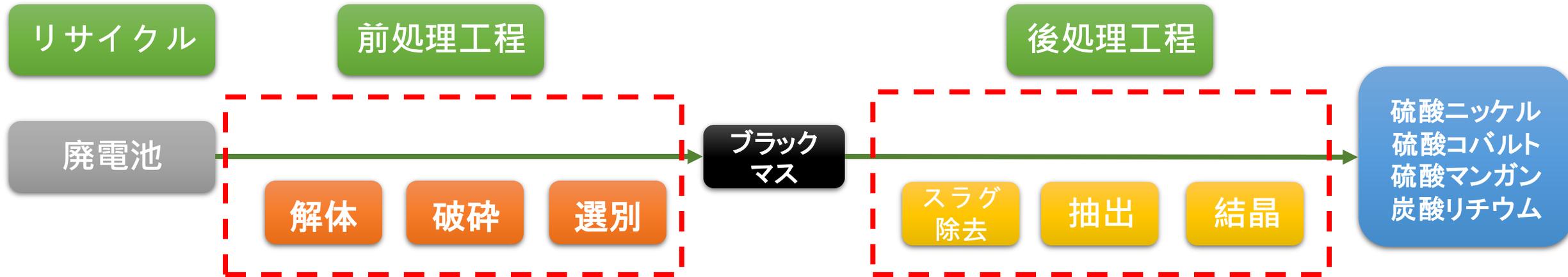


既存事業者の考え方



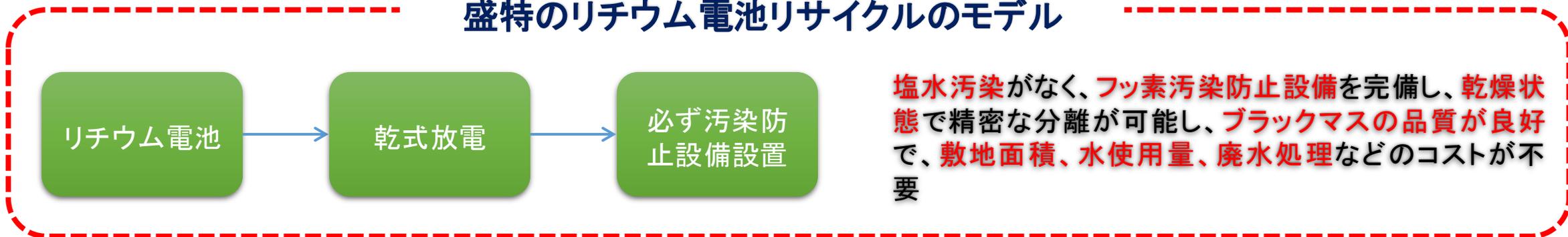
- 現在のリサイクル業者のプロセスでは、電池リサイクルの要件を満たせない：
 - 前処理が中心で、回収プロセス自体が電池用途に戻すことを目的としておらず、生成物にも原材料としての受入基準の概念がない。
 - リチウムイオン電池と従来型電池の解体の違いが考慮されていない。
 - 同一ラインで異なる種類の電池を処理しているため、ブラックマスが汚染される。
- 工程間の連携がなく、全体最適が図られていない：
 - 後工程の事業者は、リサイクル分野に踏み込むことを避けている。
 - 台湾では、後工程が関税やIRA法案の制約を受けており、販売において大きな壁に直面している。

伝統的なリサイクルの課題 vs JBCTのソリューション

現在の国内外におけるリチウム電池リサイクルの主流モデル： 従来モデル + 塩水放電

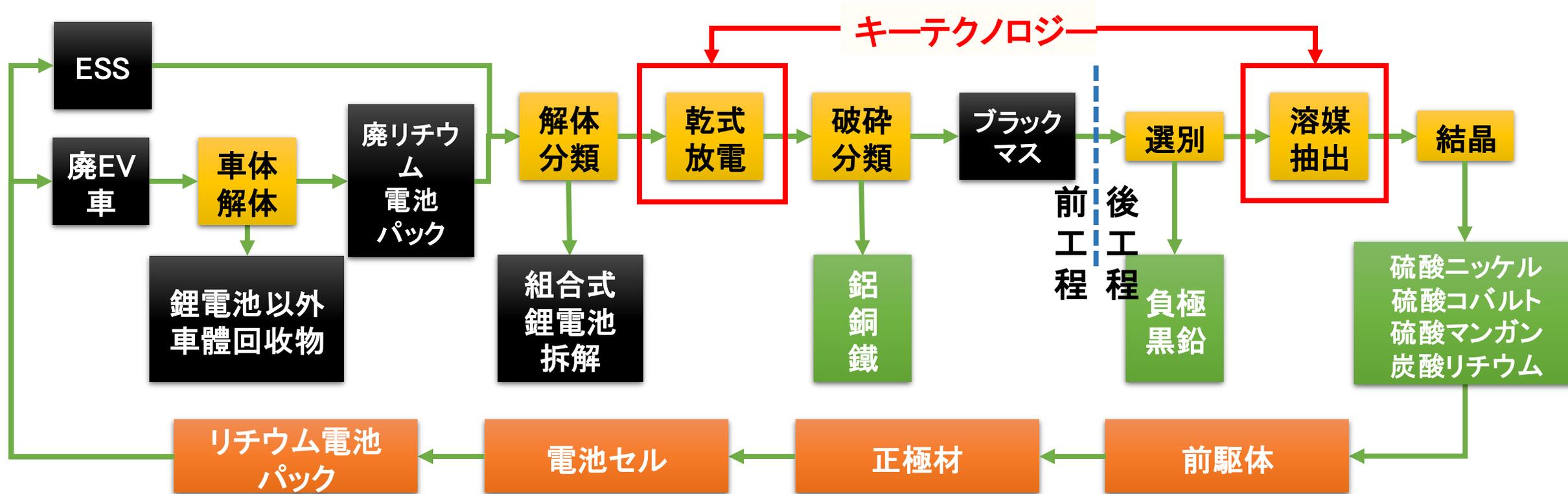


盛特のリチウム電池リサイクルのモデル



JBCTのリチウム電池リサイクルモデル

廃三元系リチウム電池のリサイクルおよび再利用



都市鉱山 – C2C (クローズド・ループ) リサイクル・再利用

盛特台湾の後工程計画をJBCTによる日本国内での計画に変更

盛特の当初計画: 全工程を台湾で生産 **3.9%関税**

盛特の新戦略: 台湾で廃電池を回収しブラックマスを生産、抽出ラインは日本の前駆体工場付近に設置

